



*more***Trees**®

- 
- 
- 
- 
- 
- 
-

## 2024 年活動報告書

- 01. 目次 / メッセージ
- 02. more trees のビジョン
- 03. 持続可能な社会に向けて深まる森林の意義
- 05. more trees の活動
- 06. 植林・育林～多様性のある森づくり～
- 07. 「多様性のある森づくり」2024 ハイライト
- 15. カーボン・オフセット
- 16. 講演 / イベント
- 17. 木材利用
- 19. 協賛者様一覧
- 23. 法人概要

## 持続可能な未来にむけて

2024年も皆様の温かいご支援のおかげで、more treesの活動を続けることができました。心より感謝申し上げます。

今年は、ネイチャーポジティブやTNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）、脱炭素といった環境トレンドがますます注目される年となりました。これらの動きは、私たちの活動にとって大きな追い風となっています。

ネイチャーポジティブの考え方は、自然環境の保全と回復を目指すものであり、私たちの森林保全活動と深く共鳴しています。TNFDの最終提言が公表され、企業が自然資本に関連する情報を開示することが求められるようになりました。これにより、企業の環境への影響が透明化され、持続可能な経済活動が促進されることを期待しています。

また、脱炭素社会の実現に向けた取り組みも加速しています。2024年は、世界中で異常気象や自然災害が頻発し、気候変動問題への関心が一層高まりました。森林はCO2の吸収源として重要な役割を果たすだけでなく、生物多様性の保全や水資源の涵養など、多くの機能を持っています。私たちは、これらの機能を最大限に発揮できる森林づくりを目指し、活動を続けてまいります。

1年を通して、企業や自治体、林業関係者をはじめとする皆様と協力し、個人で応援してくださる方々からのご寄付や森づくりへのおもいを受け取りながら植林活動を進めることができました。皆様のご支援があつてこそ、私たちの活動は成り立っています。これからも、共に手を携え、持続可能な未来を築いていきましょう。

引き続き、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

more trees事務局長 水谷伸吉

# 森と人がずっとともに生きられる社会を目指して

more treesは

「都市と森をつなぐ」森林保全団体です。

一般社団法人more trees (モア・トゥリーズ)は、音楽家 坂本龍一によって2007年に創立され、建築家 隈研吾が代表を務める森林保全団体です。

地域の実情や風土に合わせて

木を植え、育て、適切に伐り、活用することを基本とした森の保全活動を通じて「森と人がずっとともに生きる社会」を目指しています。

活動をすすめる上で大切にしているのは都市と森をつなぐこと。

森の恵みを都市へ届け、都市からは森の恵みの価値を受け止めた人々の想いや経済的な対価を森に返すことで、森と都市のあいだの循環を生みだし、あらたな関係性を紡いでいくことが私たちの考える森づくりです。





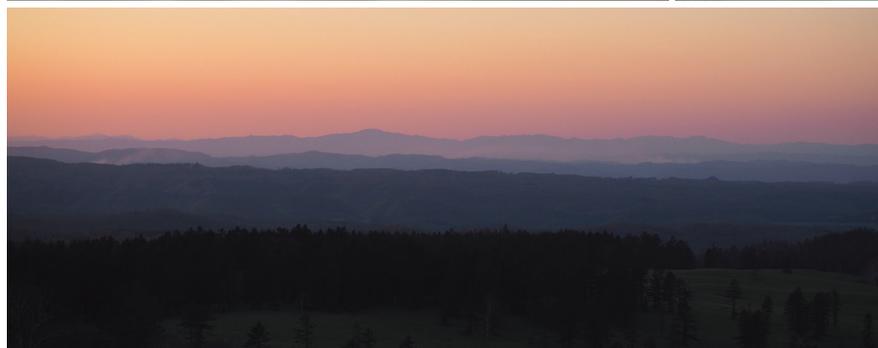
### 掘りどころとしての森

森林は、地球上の陸地面積の約3割を占め、陸上の生物種の少なくとも8割の棲み処となっていると言われています。

森林はまた、気候を調整し、大気や水を浄化し、水を蓄え、雨が降ったときの土砂流失や水害を抑え、斜面に土壌を形成します。

大量の炭素を取り込んで保持してもいます。そのおかげで大気中の二酸化炭素の蓄積を減らして温室効果や温暖化を和らげてくれます。

そしてなにより、森林は美しいもの。美しい森が地域の文化や風土を生み、人々の感性や想像力を育ててきました。多様ないのちを育む森は生き物にとってかけがえのない「掘りどころ」であり、私たち人間もまた、地球上のどこに暮らしていても森の恵みによって生かされています。



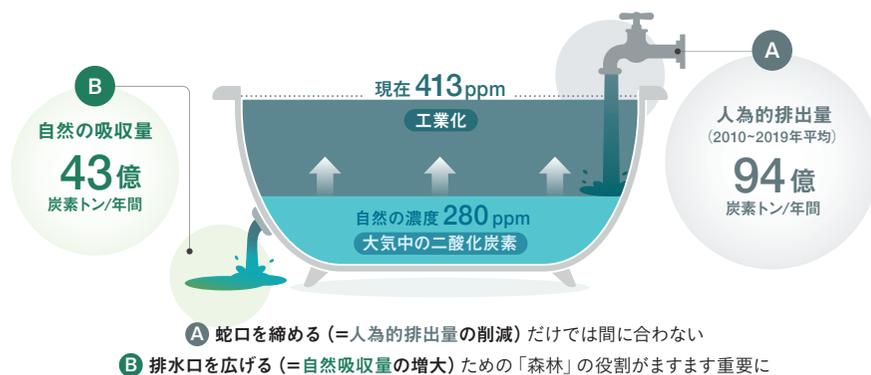
## 課題解決の鍵としての森林

2024年、世界の平均気温は観測史上最高を記録しました。WMOの発表によれば産業革命前の水準と比べて1.55度上回り、気候変動対策の国際ルール「パリ協定」で気温上昇を抑える目標とされる「1.5度」水準を初めて超過。日本でも平均気温が記録を更新し、最も暑い1年になったことを気象庁が発表しました。

こうした地球規模の「気候変動」を引き起こす主な原因とされるのは、産業革命以降の急激な温室効果ガス（主にCO2）排出量の増加で、地球温暖化や自然災害などさまざまな形で私たちの生活を脅かしています。そこで「脱炭素」の対策が世界的に喫緊の課題であるのは周知のとおりです。

脱炭素対策は、これ以上大気中のCO2を増やさないための排出量の「削減」と、すでに出してしまったCO2を「吸収」する取り組みに大別され、両軸で取り組んでいくことが欠かせません。ただし、たとえいまずぐに新たな排出量をゼロにできたとしても、過去に排出した温室効果ガスは数十年にわたって大気中に残り「気温上昇の悪循環」を引き起こしてしまいます。

そこで重要な役割を果たすのが、CO2吸収源としての森林です。脱炭素社会の実現に向けて、「植林や森林の適切な管理」によりCO2の吸収作用を保全・強化する取り組みへの関心が高まっています。



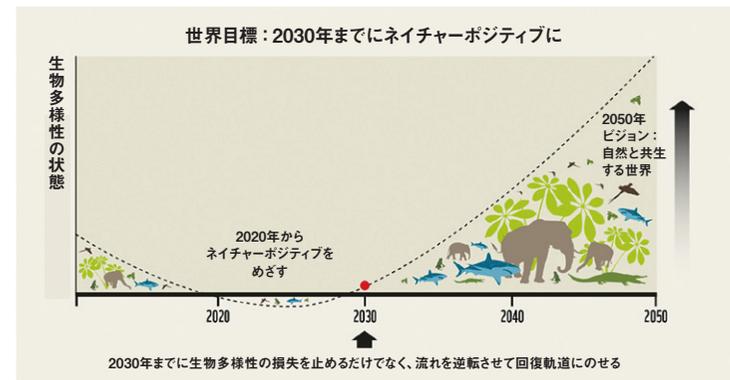
出典：Global Carbon Budget 2020

気候変動とならぶ世界的な危機が「生物多様性の損失」です。1970年～2016年のあいだに生物多様性は平均68%減少し、陸地の75%は改変され、海洋の66%は累積的な影響下にあり、湿地の85%が消失したとされています。この極めて深刻な事態を受け、地球規模での生物多様性の損失を食い止め、回復軌道に乗せようという「ネイチャーポジティブ (Nature Positive)」の動きが世界的に活発化しています。

ビジネス界においても、生物多様性の損失＝事業継続性を損なうリスクとする認識が広がりました。自然資本をベースとした経済活動による価値創造は年間44兆米ドルといわれ、世界の総GDPの半分以上に相当します。企業に対して自然関連の情報開示を求めるTNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）の提言もあいまって、生物多様性保全の対策を本気で事業活動に組み込む動きが加速しています。

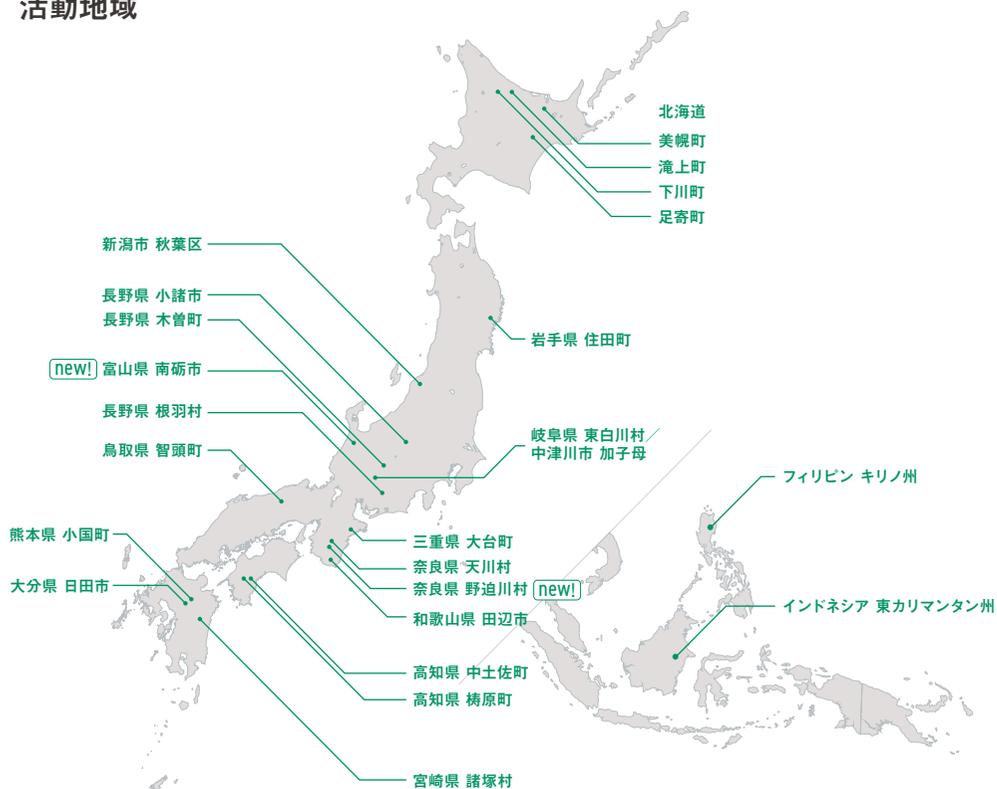
こうしたネイチャーポジティブの文脈でも森林の意義が再認識されるようになりました。森林には陸上の動物、植物、昆虫の種の半分以上と、両生類の80%、鳥類の75%、哺乳類の68%が生息し、約7,000万人の先住民を含め約16億人が生活の糧を森林に依存しているといわれます。陸域最大の生物種の宝庫であり、水資源、土壌、大気など多くの領域とも密接にかかわっている森林は、生態系ネットワークの根幹として豊かな生物多様性を支えているのです。

そして昨今、気候変動と生物多様性は別々に考えるのではなく、相互の深い関係を踏まえて一体的に取り組むべきだという議論も盛んです。脱炭素とネイチャーポジティブを両立させる鍵として森林保全への期待や関心が飛躍的に高まっています。



出典：A Nature-Positive World: The Global Goal for Nature

活動地域



more treesは国内22か所、海外2か所で森の保全活動を行っています。地域によってその方法やめざす森の姿はさまざまで、地域の行政機関、森林組合、林業家、職人、住民等と協働で森づくりに取り組んでいます。また、地域単独では解決できない課題や、その地域特有の資源に対して、都市側の企業をつなぎ、クリエイターやアーティストをつなぎ、専門家や教育機関をつなぎ、販売店をつなぎ、生活者をつないでいくことも私たちにとって大切な活動です。森と都市、それぞれの場の橋渡しをしながら「森づくりのパートナー」のみなさまと活動をご一緒しています。

2024年の実績

2024年も森林保全活動をはじめ、セミナーやイベント、カーボン・オフセットなど都市と森をつなぐさまざまな活動を実施しました。

植林した本数

79,265 本



植林した面積

45.73 ha



植林した樹種の数

60 種



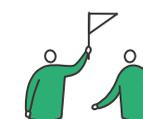
森林クレジットによってカーボン・オフセットが実現した量

2,906 t



植樹イベントの参加人数

389 人



木育ワークショップを体験した人数

265 人



講演やシンポジウムに登壇した回数

35 回



講演の延べ聴衆  
※オンライン含む

2,874 人





## 多様性のある森づくりとは

森での植林や育林を、more trees は「多様性のある森づくり」と呼んでいます。私たちの考える多様性には、2つの軸があります。

ひとつは、**森を構成する樹種やそこに棲む動物たちなど生物多様性に配慮した森づくり**であること。

もうひとつは、**森づくりへのアプローチの多様性**です。一口に森づくりといっても、どこでも使える万能の方法はありません。森ごとに自然条件や気候風土、取り巻く社会状況や課題が異なります。さまざまな方法があるなかで、地域の人々がもつ林業の技術や知識を最大限に活かしながら、専門家や有識者の方々のアドバイスも取り入れ、その土地にあった森づくりを行っています。

そして、土地に暮らす人々の生活が経済的にも適切に維持されるよう、方法を一緒に考え、実践のサポートをしています。

## 世界の森

世界では、1秒間にテニスコート12面分もの森が消失しています。1990年から2020年までの30年間で日本の面積の約5倍の森林が地球上から失われました。特に問題となっているのが、豊かな生物多様性を支える熱帯林の減少です。木材の利用を目的とした商業伐採や、農地（プランテーション）や牧草地への転換を目的とした野焼きによる開墾が引き起こす森林火災など、**人間の経済活動が熱帯林減少の大きな原因**となっています。

more treesでは、森林減少が著しい発展途上国において、**主に植林とそのメンテナンス、また森林火災防止のための防火帯や貯水池などのインフラ整備**を行っています。植林においては、在来種と共に果樹も植えることで将来的に果物の収穫を目指すほか、地域の自然資本をベースとしたグリーンツーリズムを展開するなど、多面的なアプローチによって地域課題の解決を目指しています。



森林火災（インドネシア）



貯水池（インドネシア）

## 日本の森

日本は国土の約7割が森林に覆われる世界有数の森林大国です。主要な樹木は500種類以上あるといわれています。しかし、戦後の木材需要に応えるためにスギやヒノキを植林した結果、森林蓄積量は増加したものの、人工林の約7割がスギとヒノキの2種類のみ。**森林の多様性が失われている状態**です。また近年では、採算性の悪化や担い手不足などで手入れの行き届かない森林が増え、**生物多様性の減少・保水力の低下**などが指摘されています。さらに大きな問題となっているのが「**再造林放棄地**」です。収穫期を迎え伐採された土地のうち、再び植林されている土地は3割程度。6～7割が未植栽の状態のまま放置され、土砂災害などの要因の一つになっているという指摘もあります。

こうした状況を受け、more treesでは**地域のニーズや自然条件にあわせて土地をゾーニングしながら最適な施業方法を選択**しています。林業に適した場所は引き続き単一樹種の人工林として育林するののひとつの手。一方、木材生産に適さない土地や今後手入れされる見込みがない森林は、広葉樹を含む多様な樹種を混在させた森林に更新していくことに取り組んでいます。



再造林放棄地



多様性のある森



## 新たな活動地



### 富山県南砺市

富山県南西部に位置する南砺市は面積の約8割が森林で覆われています。城端曳山祭(ユネスコ無形文化遺産)や五箇山の合掌造り集落(ユネスコ世界文化遺産)などの「日本の原風景」が色濃く残るとともに、「井波彫刻」や「五箇山和紙」、日本一の生産量を誇る野球の木製バット製造など、木に縁のある文化や地場産業を多数有する地域でもあります。

more treesは、富山県南砺市と、同地でSGEC森林認証(FM/森林管理、CoC/加工流通過程の管理)を取得し持続可能な森林経営を行う島田木材様、全国で障害福祉サービス事業を展開し誰もが自分らしく生きることができる社会インフラの共創に取り組むミチルワグループ様とともに、同市内における多様性のある森づくりの実践や苗木づくりを通じた障害者雇用の創出を目指して連携を深めていきます。

2024年は2地域と森林協定を結びました。



### 奈良県野迫川村

奈良県南西部、紀伊山地の北斜面に位置する野迫川村。平均標高700mと標高が高く、年間を通して雲海が発生しやすいことから「天空の国」と呼ばれています。息を呑むほど美しい雲海の舞台となるのは村の総面積の97%を占める森林です。プナヤナラ、シデ類など四季を肌で感じることができる広葉樹の森も広がり、豊かな森林資源を有しています。

more treesは、野迫川村のイタツゴ地区にあるスギ・ヒノキの伐採跡地で植林を計画中です。以前、村が独自に広葉樹のコナラを植栽しましたが、急峻な地形のため落石等により獣害対策ネットが破損し、シカ等の動物の食害を受けてしまいました。今後は地形条件の厳しさを考慮して「自然に近い状態に戻す」「なるべく人の手間を減らす」という2点を優先的に考え、企業からの協賛を得ながら再植林を進めていく予定です。

## 地域性苗木の生産

植林をする際に欠かせない苗木。なかでも、地域に自生している樹木から種を採取して育てられた「地域性苗木」を使うことをmore treesは大切にしています。特に広葉樹の苗木は全国的に生産者が少ないからこそ、森づくりのパートナーのみなさまと協働で苗木生産を行っています。

### 岩手県住田町

住田町、一般社団法人邑サポートとともに地域住民参加型の育苗プロジェクト「なえうえる」をスタートして2年目。311後に多くの被災者のいのちを支えた木造仮設住宅跡地で苗木を育てています。春の鉢上げイベントでは、苗木を家に持ち帰って育てたいという声があがり「苗木ホームステイ」がスタート。専門家も招いてなえうえるの参加者と情報交換を行うオンラインコミュニティ「なえうえりゃー」も始動し、地域をこえた人々のつながりとともに育苗の輪が広がっています。



### 北海道美幌町

美幌町立旭小学校の1~3年生の子どもたちと森づくりプロジェクトをはじめて3年目。山での種採りや校内につくられた育苗棚での水やりなどを経験しながら、子どもたちが苗木を育ててきました。9月、大きくなった苗木をいよいよ山に還すことになりました。苗木を託されたのは2年間お世話をしてくれた3年生。嬉しそうに苗木を受け取り植えてくれました。植え場所の目印にさしていた木杭を、苗木の周りにさしはじめる子も。まるで大事な苗木のボディガードのようでした。



## 楽しくて、楽しくて

株式会社 KIRecub  
代表取締役 下村智也さん  
高知県梶原町

—なぜ梶原町で林業に携わるようになったのか、きっかけを教えてください。

両親が梶原出身で、両親は若いころ離れてしまいましたが祖母がずっと住んでいました。小さい頃、夏休みに祖母の家に遊びに行くことがよくあって、梶原の自然がずっと心に残っていたんです。大学になっても社会人になってもつらいことがあれば梶原に戻ったりして。あるとき、別の町で林業体験ツアーがあることを知って軽い気持ちで参加してみました。アウトドアが好きだし、当時は広島で医療系の営業をしていたので、営業のネタにもなるかなと。そこで林業がめちゃくちゃ面白いと思ったんです。半年か1年くらい考えていたら、ちょうど梶原町で地域おこし協力隊の募集があり、原点の梶原で林業に携われるならと思いついて移住してきました。2021年のことです。

—先日、地域おこし協力隊を卒業されましたよね。

3年の任期を終えて2024年9月に卒業しました。いまは株式会社KIRecubの代表を務めています。KIRecubは、協力隊1年目の2022年に任意団体と



して立ち上げたのがはじまりです。当時梶原町では木を伐る人が60人ほどいたのに対して、造林や育林をやっている人はわずか2、3人。大好きな梶原の森を守りたいという思いも強く、造林・育林をメインにする団体としてスタートしました。

—都市で暮らしていると林業って具体的にどんな作業をしているのか分からないという方も多いと思うのですが、1日のスケジュールはどのような感じですか？

たとえば夏の下刈りの日は、朝3時半に起きてお弁当の準備をします。現場に着くのが5時前くらい。5時~5時半に作業をスタートして、9時くらいになったらお弁当を食べます。暑いなかでの作業はかなり体力が必要なので疲れたら小休憩をとりながら作業していますね。11時くらいになると暑くて限界がくるので作業終了。家に戻ってお風呂に入り、ごはんを食べてお昼寝。こんな時間に仕事が終わるって最高です。

—下刈りは林業のなかで一番過酷と言われますよね。やはり大変ですか？

僕、変態なんで下刈りが大好きなんです（笑）めっちゃ汗かいてとことんやったあとに飲むビールがうまい！肉体的にはきつんですけど精神的には全然きつありません。昔、営業でとことん追い詰められたこともありましたが、それに比べると楽勝、もう楽しくて楽しくて。

—苗木を植えるときはどのくらいのペースで植えていますか？

8時半から15時半くらいのあいだに500本とか植えます。休憩を1時間くらいとりながら。最初は僕も全然植えられなかったんですけど自然に体が慣れてきますね。

—more trees と出会ってから変化を感じることはありますか？

林業をやっている人はとても少ない上に、以前は林業家だけで集まって林業界を盛り上げようという閉ざされた雰囲気を感じていました。でもmore treesさんのおかげで異業種の企業ともつないでもらうことができて、それが自分たちの新しい事業のきっかけになったりもしています。そのひとつが育苗です。視察に来られる企業の方たちに育苗現場を案内するとすごく感動するんですよ。KIRecubさんともっと一緒になかしたいというお声もいただいています。more treesさんがハブになってくれて、自分たちの事業の幅も広がり、森のよさをより多くの人に届けられるようになったなと思いますね。

—2024年のハイライトを挙げるとしたら？

ひとつはKIRecubを法人化したことです。最初は個人事業主でやっていくつもりだったんですけど、森や環境問題はひとりじゃなかなか立ち向かえない。自分自身、しっかりした立場に立つことで大手の企業の方とも対等に話せるようになりました。KIRecubは地域おこし協力隊卒業生の受け皿になりたいという信念もあって、卒業しても安心して働ける場所として、森や山に興味がある人なら誰でも受け入れたいと思っています。森づくりは30年、50年、さらに100年をこえて続いていくので、会社もずっと存続させていけるようにしていきたいですね。もうひとつのハイライトは苗木の初出荷です。役場近くにKIRecub苗木園をつくったのが2023年。そこで育てた苗木が大きくなって、10月に高知県の中土佐町に初出荷できたのが嬉しかったですね。苗木園にはさらにエピソードがあります。あそこは町有地なんですけど、苗木園の前は土地をうまく活用するアイデアがなくて草ボーボーの空き地になっていました。でも実は僕、その土地をずっと知っていたんです。町有

地になる前は3軒の家が建っていて、そのひとつが祖母の家。小さい頃からずっとそこで遊んでいました。

—まさに運命ですね。ご自身の成長を見守ってくれた思い出の地で、種から育てた苗木を出荷したときのお気持ちは？

もともと僕はどんぐりがどうやって芽を出すかも知らなかったんです。それでもみんなで一生懸命に育てて、立派に育った苗木を送り出したのはやっぱり感動しました。苗木の種を拾ったのがうちの娘だったので、なおさら嬉しかったですね。



—これから挑戦したいことはありますか？

おかげさまで企業さんとのつながりが太くなりました。一方で、個人でも僕たちの活動を応援したいと言ってくれる方がけっこういらっしゃいます。森づくりツアーで森の現場や苗木園をご案内すると感動されて、そういう個人の方向けにもなにかできなかなと思っています。

—最後に、この瞬間があるから森づくりは楽しいということがあれば教えてください。

以前やっていた仕事だと商品を買ったらそれでおしまい、そのあと使ってもらえてもせいぜい5年くらいでした。でも森は自分が死んだあとも残りません。広葉樹だったら100年後、数百年後の後世に残せる。これは言葉では言い表せない仕事だなと木を植えるたびに思います。下刈りやそのほかの細々とした仕事でも、作業ひとつひとつに感動がありますね。



### 企業の森

「企業の森」とは、多様性のある森づくりへの法人参加型プログラムです。脱炭素社会やネイチャーポジティブの実現に向けた実践のひとつとして取り組みを開始される企業が増えています。企業の森の特徴は、地域を指定して継続的にご協賛いただくスタイルであること。実際に現地に足を運び、森に入り、地域の方々との交流を通じて関係を育みながら、地域活性に貢献できることも醍醐味のひとつです。自然豊かな現地でのツアーや植樹体験などのイベント開催、ワーケーションやオフサイトミーティング先としての利用、学生インターンなど採用活動との接続、地域産材をいかしたノベルティや店舗什器の製作など、企業の森の活用事例も年々広がりを見せています。

					<b>北海道 美幌町</b> ・あおいニッセイ同和損害保険株式会社 ・株式会社ロイヤリティ マーケティング ・株式会社I-ne ・株式会社サッポロドラッグストア	
			<b>北海道 下川町</b> ・株式会社エヌ・ティー・エイチ		<b>北海道 足寄町</b> ・第一生命保険株式会社	
		<b>岐阜県 東白川村</b> ・auじぶん銀行株式会社		<b>岩手県 住田町</b> ・株式会社コナイテッドアローズ ・株式会社メンバーズ ・三井住友カード株式会社		
		<b>鳥取県 智頭町</b> ・キャロウェイゴルフ株式会社 ・日本ロレアル株式会社		<b>長野県 木曾町</b> ・株式会社DINOS CORPORATION <b>長野県 小諸市</b> ・三井住友カード株式会社 <b>長野県 根羽村</b> ・シチズン時計株式会社		
		<b>高知県 梶原町</b> ・三井住友カード株式会社 ・青山商事株式会社 ・株式会社ホットスタッフ・プロモーション		<b>三重県 大台町</b> ・株式会社シモジマ ・住友生命保険相互会社 <b>奈良県 天川村</b> ・デッカーズジャパン合同会社 ・株式会社三井住友銀行 ・三井住友ファイナンス&リース株式会社 ・三井住友カード株式会社 ・株式会社TRACE		
		<b>宮崎県 諸塚村</b> ・三井住友カード株式会社		<b>和歌山県田辺市</b> ・株式会社セールスフォース・ジャパン ・マニユライフ生命保険株式会社		
		<b>インドネシア 東カリマンタン州</b> ・カラース株式会社				

### 2024年スタートの企業の森

2024年はあらたに4つの「企業の森」がスタートしました。

- CITIZENの森@長野県根羽村
- HOT STUFFの森@高知県梶原町
- Manulife Impact Forest@和歌山県田辺市
- 住友生命の森@三重県大台町

2024年12月現在、国内外あわせて16地域で25社の企業のみなさまに森づくりへご参画いただいています。



## 天川村の人が好き

デッカーズジャパン合同会社  
コーポレート PR/CR マネージャー  
水谷美奈子さん

### —more trees との出会いはいつになりますか？

2021年の春、植物由来の素材をつかったUGGのコレクションのプロモーションでmore treesの水谷さんにご登場いただいたのが最初の出会いです。当時はブランドマーケティングを担当していたグローバルで植樹のための苗を寄付するという動きがありました。デッカーズジャパンとしては日本の森に木を選べる団体を選びたいとの思いからmore treesさんにご相談すると、すぐに水谷さんと岸さんが活動紹介をしにオフィスへ来ていただきました。話をうかがった4名全員が「これやりたい」「やろう!」と。それが5月末で、あつという間に話が進んで7月には契約を結びました。その後、現在のコーポレートPRや社会貢献活動の担当になり、引き続きUGGの森に関わっています。

### —森づくり4年目の今年は、植樹以外でも天川村に行かれていましたよね。

1年目は、記念植樹で1人1本植えることと、天川村がどういう場所か、どんなコミュニティなのかを理解しようということではじまりました。でも参加したスタッフから、草刈りでもなんでもいいか



らもう一度行きたい、もっと関わりたいという声があがっていたんです。あるとき、more treesのみなさんは企業のツアー以外に生育調査で現地へ行っているという話を聞いて、私たちもなにかできないか岸さんに相談しました。それで今年は秋のツアーとは別に春にも行ってみよう。シカの被害にあった場所にネットを張ったり、もう一度苗を植える補植をしたり、苗木の鉢上げ作業もやらせていただきました。参加したメンバー全員から出たのが「こういう作業をみんなもやったほうがいい」という感想だったので、秋のツアーでは初参加のメンバーもネット張りを経験し、植樹も1本ではなく3人で15本くらい植えましたね。

### —大変なネット張りなどもやりたい、もっと作業したいという気持ちはどこから湧いてくるのでしょうか。

やっぱり天川村に訪れたときの感激ですね。森に入った瞬間にすごく癒されるという経験をみんなもしていますし、森づくりは天川村にとってとても大切な営みだという理解も深まったので、できることをしたいという思いがあります。何よりもみんな天川村の人たちの優しさに触れているんです。天川村も好きだけど、天川村の人たちが好き、ということを行く人行く人が感じています。

### —天川村行きが憧れになって社内で「プラチナチケット」と呼ばれていると聞きました。何がきっかけでこれほど社内で浸透したのでしょうか。

1度目の現地ツアー参加者にセールスの責任者がいたこともあり、翌年に全国から店長など60名弱が天川村に集まって店長会を開いたんです。天川村のみなさんの手厚いサポートを受け、それまでない店長会になりました。天川村を訪れた人たちが「すごくよかった!」という感想を周りに

シェアしてくれたので、あの店長会が社内に急激に広まるきっかけになったと思います。マネジメントの人たちが植樹ツアーに参加していることでチームのメンバーを行かせることになんの躊躇もないというのも大きいですね。

### —ツアー参加者は毎年変わるのにデッカーズさんと天川村との関係は年々深まっている印象があります。関係を育むために工夫されていることはありますか。

私は初年度から毎年行っていますし、GMも行っています。トップが毎年参加しているのは、村の方々との関係が深まる一因になっているのではないのでしょうか。私たちが天川村を訪れるだけでなく、天川村産の木材をオフィスやお店ですったり店舗に木製POPを置いたり、森以外の場での関わりもあります。原宿店がオープンしたときは、天川村の方がいらしてください東京と一緒に過ごしたりもしました。

### —2024年のハイライトを挙げるとしたら？

はじめて春にも天川村へ行ったことが大きかったです。2025年からは年に2回のツアーを組む予定です。秋は初参加者向けのエントリーコース。春はすでに一度参加したことのある人がさらに森づくりの奥を体験できるディープコースにしようと思っています。

### —more trees と出会ってから変化を感じることはありますか？

私は山口県出身で、山が近かったので子どものころはよく走り回っていました。それだけに森は身近な存在だったんですが、いまこうして森づくりに関わるようになると、苗木を1本植えるのも大変、土に鍬を入れるだけでも労力がかかり、これ全部やるの?と思うほど現場の方の技術の素晴らしさと負荷の大きさを痛感します。ネットを張るのもとて

も難しかったですし。そういう実感を積み重ねながら森の現状のお話を聞いているうちに、ちょっとしたことでも試してみようと思うようになりました。先日more treesのInstagramで、鉢植えて苗木を育てているのを見て、私もいま植木鉢で育てています。天川村の杉本さんがキハダとオオヤマザクラの種を送ってくれて、育て方も一緒に添えてくださったんです。無事に育ったら天川村の森へ持っていきます。うまくいけば社内で希望者を募ってみんなで育苗してみようかなとも。自分で苗木を育てた人は天川村に行く権利をあげるとか(笑)

### —まさにプラチナチケットですね。他にも挑戦したいことや、今後の展望があれば教えてください。

同じ天川村で企業の森づくりに取り組んでいる三井住友カードさんと先日お会いした際、いつか一緒に行きたいですねというお話をしました。天川村の森をサポートしている企業が同じタイミングで行くことができたら、天川村の方にとってもより豊かなコミュニティができるのではないかと考えています。UGGの森については、これまで続けてきた植樹がひと段落したら、この森に対して私たちは何ができるのかということを考えているところです。シカの被害からもある程度守れるようになったら、いかに森を育てていくかというフェーズに入っていくと思うので、新たな関わりも模索していきたいです。

### —最後に、森づくりの魅力を教えてください。

ひとつは景色の素晴らしさ。あの景色は天川村に行かなければ見ることができません。そして、あんなに温かいみなさんとの交流というのも、ふだんの東京の生活だとなかなかない。基本的にはビジネス上のお付き合いですが、心から温かい方たちだと思います。





## 森づくりの未来を拓く“すみたモデル”視察研修

10月、年に一度の視察研修を岩手県住田町で行いました。北は北海道から南は九州まで、more treesの協定先地域から森づくりに取り組む担当者が集結。第一線で活躍されている方々だからこそ積み上げてきた知見や事例を紹介しながら、地域をこえて森づくりの技術共有と人的交流を図るプログラムです。1日目は住田町役場でのトークセッションでスタート。“すみたモデル”をキーワードに、地域の方々が自身の経験や強みを持ち合ってより大きな取り組みを生み出している住田町の森づくりの魅力や、地域住民を巻き込んだ育苗プロジェクト「なえうえる」などが紹介され、別地域への横展開の可能性についても交わしました。2日目は外へ出て植林地を視察。施業方法や獣害対策など、現場目線での質問が飛び交いました。また、地域住民の絆の象徴である木製の流れ橋・松日橋やなえうえるの育苗施設の見学も行いました。



**Date:** 2024.10.16-17

**Place:** 岩手県住田町

**Participants:** 31

**Program Day1:** トークセッション

**多様性のある森づくり**  
more trees 岸卓弥

**住田町の森林・林業と広葉樹施業**  
住田町 石橋颯己様

**すみたモデル**  
more trees 宮崎悠

**地域住民参加型の苗木づくり**  
一般社団法人邑サポート 奈良朋彦様

**座談会**  
すみた森の案内人 吉田洋一様  
気仙地方森林組合 木下静恵様  
住田町 石橋颯己様  
邑サポート 奈良朋彦様

**懇親会**

**Program Day2:** フィールド視察

**植林地「箱根峠」**  
気仙地方森林組合 木下静恵様

**木製の流れ橋「松日橋」**  
松日橋維持管理組合組合長 金野純一様

**育苗プロジェクト「なえうえる」・木造仮設住宅**  
邑サポート 奈良朋彦様・伊藤美希子様

## 目的と技術の両輪で

造林技術研究所 代表  
横井秀一さん

—岐阜県立森林文化アカデミーの特任教授をはじめ森林や広葉樹のスペシャリストとしてさまざまな肩書をお持ちですね。普段のお仕事から教えてください。

以前は岐阜県職員として、森林研究所の研究者と森林文化アカデミーの教員をしていました。いまはフリーランスで森林や造林に関する調査研究、技術指導や助言、造林教育や人材育成に携わっています。たとえば岐阜県飛騨市や愛知県豊田市では行政の取り組みに対する技術的なアドバイスをしており、教育関係では森林文化アカデミーのほかに林業アカデミーふくしまや島根大学、愛媛大学などで教えています。また、林業従事者向けの技術研修や市民向けの森林講座の講師なども務めています。

—なぜ広葉樹を扱う道に進まれたのですか？

岐阜県に就職した当時、県内には高山市と美濃市の2か所に研究機関があって私は高山市の寒冷地林業地試験場に入りました。美濃市の岐阜県林業センターが県下全域を対象としてスギ・ヒノキを中心に扱っていたのに対し、高山市のほうは

雪と広葉樹を扱うことに。高山は雪が多くスギ・ヒノキの人工林化が遅れた分、広葉樹が残っていたことや広葉樹の地場産業が盛んだったこともあって広葉樹が対象になったんです。それが今につながります。

—日本各地のさまざまな現場に関わられているなかで、広葉樹の森づくりに対する意識の変化や現場での課題などを感じられることはありますか。

全国的に広葉樹に対する機運が高まっているのは確かです。もともと広葉樹が充実しているところではそれを活かしていこうと考える人が一定数いますし、これからは広葉樹がいいといって新たに向き合いはじめる人もいます。ただ、具体的に何をどうしたらいいかわからないのでアドバイスがほしいという声もよく聞きますね。スギ・ヒノキの造林技術は世界に誇れるほどに成熟していて、林業に携わっていれば自ずと技術が身につきますが、その延長線で広葉樹に向かおうとすると痛い目にあう。広葉樹にそのまま適用できないことも多いんです。ところが広葉樹施業については習得する機会もなくて、手探り状態の人が非常に多いことを全国的な課題として感じています。また、どういう森林を目指すのかがあまりよく見えていない例も少なくありません。広葉樹の森のぼんやりとしたイメージだけあって、具体的な姿を捉えきれていないんですね。

—具体的に危機感を感じた事例などはありますか。

たとえばスキー場の跡地を緑化するとき、多くの場合は植栽という手段をとります。表土を剥いでしまつて踏み固められ、雪も積もるといふ悪条件を考慮しながらその土地にふさわしい樹種の選択をする必要がありますし、植栽の手法も工夫を要するかもしれません。けれどもそうした条件を考えず、森林の多面的機能のうちどの機能を高めるかという目

的もはっきりしないまま、安易に桜を選択してしまうとどうでしょう。きちんとした根拠を持って議論するプロセスが抜け落ちているんですね。どんな森づくりをしたいかという目的と、それを具体化するためのエビデンスを持った技術。その両輪で真摯に取り組む必要があります。

—学生さんたちは広葉樹に対してどのようなイメージを持っているのでしょうか。

興味を持つ学生は多いです。将来、課題研究で広葉樹に取り組もうとしている人もいます。一方、広葉樹施業の講義は少ないのが現状です。スギ・ヒノキ中心で学んでいて、すこし広葉樹の話が出てくる程度。実習も針葉樹の人工林での作業がほとんどですね。森林文化アカデミーでは広葉樹施業に触れる機会もありますが、ほかの林業大学や大学ではほぼほぼそういう機会はないと思います。

— more treesと出会ってから横井先生ご自身や周囲で変化を感じられたことはありますか。

more treesと一緒に仕事をするようになったのは2022年。東白川の森づくりが動き出したときに相談に乗っていました。それから長野県木曾町、高知県中土佐町、和歌山県田辺市などにも呼んでもらい、それぞれの地域で多様な考え方で森づくりに取り組む人たちと知り合ったことはとても勉強になりました。私自身もより各地の事情に応じたアドバイスを考えるようになりましたし、講師として教える場面でmore treesの取り組みを学生に紹介することもあります。施業内容とその結果を技術的な視点で見る事例として使っていますが、自分のなかの引き出しが増えたことは非常にありがたいですね。

—2024年のハイライトを教えてください。

木曾町の森では、さまざまな樹種の広葉樹を選び、植え方のデザインを関係者のみなさんと現場で考



えて植栽しました。しばらく経って生育調査をした際、一部調子が悪いところがあったので調べてみると、ある理由で土壌構造が破壊されていたことが分かり土壌とそれに適した樹種の関係を見つめ直すとてもいい現場になっています。また、植栽したものを育てて自然に生えてきたものは下刈りで刈ってしまうというやり方よりも、天然更新も上手に活かすといだらうと私は考えているのですが、木曾町も田辺市もそのあたりをしっかりとみていく現場になっています。植栽と天然更新の組み合わせを最初から織り込みながら作業のデザインを考えていくこと。その手法を提示するためのベースになるような情報が得られる場所ですね。

—これからどんなことに挑戦してみたいですか。

地域産の苗を使った森づくりの比重を高めていけるといいですね。そのためには苗づくりのノウハウをいろいろな地域で共有する仕組みづくりが大事。そのお手伝いをしたいです。樹種の選択は私自身迷うこともあるので、実際に植えてちゃんと育つかどうかの情報の質はもっと高めたいと思っています。そういうことをmore treesと一緒にやっていきたいです。

—最後に、なぜこれほどまでに森に関わり続けてこられたのか、横井先生を惹きつける森の魅力とは？

森も木もおもしろい興味が尽きません。とくに広葉樹は多様な樹種があってそれぞれ表情も違うし分布も異なり、広葉樹の多様性を肌身で感じます。私の場合、五感でというよりなぜこの木がここにいるのかとか、10年後はこっちの木はいなくなっているのだろうかとか、科学的な目、生態の目を通じて考えることが好きですね。自分が持っている知識で目の前の現象を説明できるのは楽しいし、新たな発見もある。つねに知的好奇心に駆られるのが森の一番の魅力です。





## 森を想う企業をつなぐ「more trees パートナー会」初開催

11月、企業・団体のみなさまを対象に「企業の森づくり」に関するはじめての交流の場として「more treesパートナー会」を開催し、24社から40名を超える方にご参加いただきました。環境省および林野庁のお二方による基調講演では「ネイチャーポジティブ」「生物多様性」といった世界的トレンドを解説いただくとともに、国内での具体的なアクションや関連する法制度、企業の森づくりの事例などをお話いただきました。後半は、実際に企業の森づくりに取り組んでいる4社にご登壇いただき、森づくりを通じた自社の変化や発見、企業価値を高めるアイデア等をご紹介いただきました。これまであまり接点のなかった企業同士が「森づくり」「森林保全」への想いを共通項に横につながる場として大変よいスタートを切ることができました。ご好評につき、今後も年に1度の開催を予定しています。



**Date:** 2024.11.26

**Place:** 東京都中央区晴海 (株式会社メンバーズ社内)

**Participants:** 24社45名

**Program:**

**1 minute 自社紹介**

多様性のある森づくり  
more trees岸卓弥

ネイチャーポジティブに向けた国の取組  
環境省 笹渕紘平様

企業の森づくりと生物多様性  
林野庁 藤原智史様

地域紹介movie

「企業の森」先行事例  
三井住友カード×メンバーズ 佐々木文也様、原裕様  
デッカーズジャパン 水谷美奈子様  
青山商事 長谷部道丈様

懇親会

# 見える世界が 変わりました

株式会社ミチルワグループ  
笹嶋正吾さん

## —普段はどのようなお仕事をされていますか。

障害福祉を生業とするミチルワグループで、新規事業開発を担当しています。具体的には障害者採用を推進したい企業に向けた雇用支援サービスの立ち上げです。公的支援の枠組みを飛び出して、地方に住む就職希望の障害者と都市部にある障害者を採用したい企業とをマッチングする仕組みづくりなのですが、企業の森づくりやSDGs活動と障害者雇用を両立させるものです。まずは富山県からスタートし、将来的には全国各地に広がっていきます。

## —more trees と出会ったきっかけは？

2023年12月の日経SDGsフォーラムで水谷さんに声をかけたのが最初でした。事業の構想段階でさまざまな可能性を探っているなかで、人手不足の課題がある林業に障害者の活躍の場がつかれないかというリサーチをしていたんです。フォーラムに参加してみたら感動してしまって、そのあとすぐmore treesのオフィスで水谷さんとたっぷり話しました。more treesのことはもちろん、森林や林業の大枠から、林業と福祉の連携の可能性、



企業に関わることで変わる未来などの考察もしてくれて、その後のうちの事業開発に大きな影響がありましたね。

## —それから各地の森を回られていましたよね。

森のことも林業も苗木も素人なので一次情報を取りに行きたいと思っていたら、more treesのみなさんにいろいろ誘ってもらったんです。2024年の2月に三重県大台町の視察研修に参加したあと、富山県南砺市、岩手県住田町、高知県梶原町へ行きました。住田町のときは鉢上げイベントがあると宮崎さんに誘われて。広葉樹の苗木の育て方を調べても情報がなく困っていたタイミングだったのでまたとないチャンス!とついていきました。

## —そのときに苗木を持ち帰られたのですよね？

クヌギとコナラを1トレイずつ、70本くらい。自宅マンションのベランダに置いて、毎朝5時に起きて水やりして観察しました。記録を見ると4月25日に芽が出てきてますね。ちょっとずつ芽生えて、育て、めっちゃくちゃ楽しいですよ、育苗。

## —そうやって育てた苗木が住田町に里帰りしたのが10月の視察研修のときで、車のトランクいっぱいには苗木が積まれていた光景は今でも忘れません。育苗をしてみても見などありましたか。

目に見える世界が変わりました。どんぐりもひとつひとつに個性があるんです。すぐ発芽してどんどん育っていくタイプもいれば、この子はダメなのかなと思っていたら3カ月くらい遅れて急に芽が出てきたり。猛暑で日焼けしちゃう子もいれば強い日差しでも全然大丈夫な子もいます。人間と同じじゃん!と。考えてみたら当たり前なんですけど、実際そういう個性を目の当たりにしたのは衝撃でした。樹種だけじゃなく、苗木や種ひとつひとつも多様性があるんですよ。



## —そこに林業と福祉、林福連携のヒントが？

いろいろ学んでいくと、広葉樹の苗木生産は産業化されていないことがわかりました。人手が足りない一次産業のなかでも特に広葉樹の苗木生産は回ってなくて、植えようと思っても苗木がない。そこに障害者が入って仕事として携わることで、広葉樹の苗木生産の道筋を作れないかと思ったんです。さらに僕の本業である、障害のある人の多様な生き方を実現していく手立てのひとつにしていこうというのが、自分で苗木づくりをしてみて辿り着いたことですね。

## —たった半年ほどでもものすごい変化ですね。

苗木や森と関わるようになって、自分の暮らしも変わりました。僕はサーフィンをするので毎週海に行くんです。でも豊かな海を守るために自分にできることは?とはあまり考えたことがなかった。ゴミを捨てることくらいでした。でもmore treesと出会って、森と海はつながっているという構造を知り、そこでも見える世界が変わりました。苗木を育てて山に植えたら、20年、30年経って森を形成し、地域の水を育み、暮らしを守り、住田町であれば森からの水が広田湾に流れ込んで僕の大好きな牡蠣を育てるんです。めっちゃくちゃ壮大ですよ。ほんの僅かでも自分がそこに携われるというのはすごく価値のあることだし、自分自身が変わります。森林保全やカーボンニュートラルという言葉は知りながらそこまで心が向いていなかった人でも、森づくりをリアルに体験することで自分事になりますね。そうそう、最近僕は木製のものを買おうと思うようになりました。どこの木を使っているのか、FSC認証かといった情報も気にするようになったのと、木製品以外でも共感できる取り組みをしている企業のプロダクトを買おうという気持ちになりました。日々の暮らしが変わりましたね。

## —2024年のハイライトは何になりますか。

ひとつは苗木を自分で育てたこと。もうひとつは、南砺市、島田木材、more treesとミチルワグループで連携協定を結んだことです。上半期で林業や森林保全界限の方に200人以上は会ったのですが、more treesも島田さんも事業開発の初期フェーズで自分たちのことを受け入れてくれました。さらに行政も巻き込んだパートナーシップを結んでくれたのがすごく嬉しかったです。それだけ期待してもらっているの、僕たちもぜひ応えていきたいですね。

## —今後チャレンジしたいことは？

まずは企業向けの障害者雇用支援サービスを軌道に乗せ、拡大していく道筋をつけていくこと。広葉樹の苗木生産の産業化と障害者雇用を合わせてやっていきたいです。それから育苗の研究もチャレンジしたい。どういう記録をすれば価値を生むのがまだ分からないんですが、more treesさんと一緒にいいアウトプットをして、あの子たちの価値を生み出していきたいです。

## —笹嶋さんが苗木を「あの子」「この子」と呼ぶのが好きです。最後に、笹嶋さんにとって育苗とは？

いやあ、100年先の未来に貢献するロマンです!より多くの人に苗木づくりを体験してもらいたいですね。





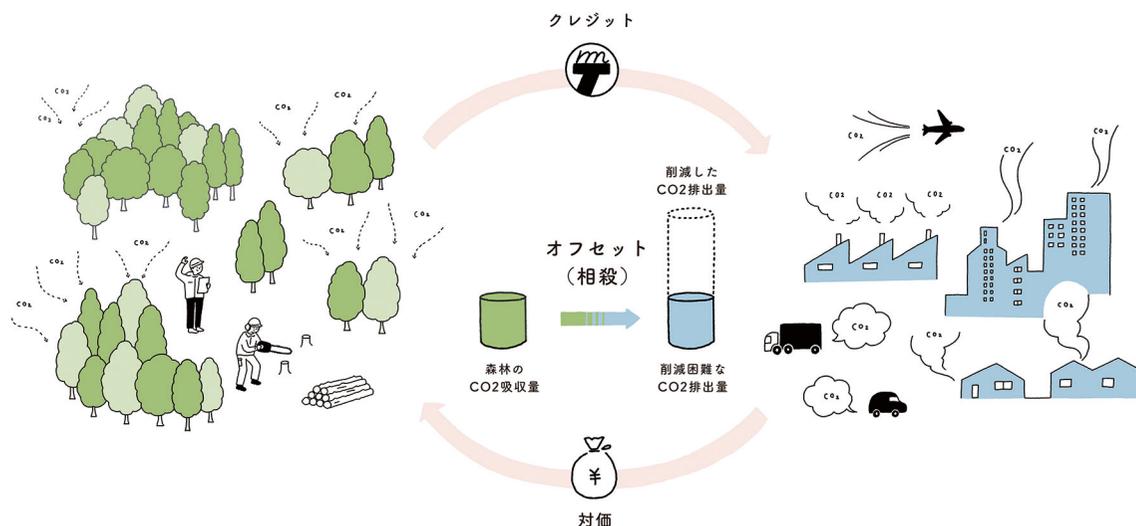
### 森林由来のカーボン・オフセットの取り組み

more treesは、「森林由来のクレジット」を活用したカーボン・オフセットサービスを提供しています。森林由来のクレジットとは、森林をCO2吸収源と捉え、「植林や適切な森林整備によって増大したCO2吸収量」をクレジットとして価値化したものです。日常生活や経済活動で排出されたCO2のうち、削減努力をしてもどうしても削減できないCO2排出量を森林のCO2吸収量でオフセット（相殺）することで脱炭素社会の構築に貢献いただけます。

オフセットの対象となる活動は企業ごとに多種多様です。たとえば、自社工場からのCO2排出量、ホテルの宿泊に伴うCO2排出量、イベント開催に伴う参加者の移動によるCO2排出量などがあります。TCFD（気候関連財務情報開示タスクフォース）の提言に基づく企業の気候変動関連の情報開示などにも活用いただいています。

森林由来クレジットの対価は各地域での森林保全活動に還元されるため、土砂災害防止、水源涵養、生物多様性保全などの「森林の多面的機能の回復」や森林を有する「地域経済の活性化」にもつながるという側面があります。気候変動対策にとどまらない持続的な森づくりや地域貢献に意義を感じ、森林由来クレジットをお選びいただくケースが増えています。

2024年は25の企業に合計2,906トンのクレジットをご活用いただきました。



### 活用事例

**アステリア株式会社 × 熊本県小国町**  
株主総会の会場での電力使用に伴うCO2排出量をオフセット

**ウィルライフ株式会社 × 高知県中土佐町**  
棺ひとつの販売につき1回の葬送に伴うCO2排出量をオフセット

**株式会社ギア × 高知県中土佐町**  
スマートフォンやタブレットなどの中古端末1台の販売につき10kgのCO2をオフセット

**近畿日本ツーリスト × 高知県中土佐町**  
個人募集型企画旅行に伴うCO2排出量の一部をオフセット

**株式会社スーパーホテル × 宮崎県諸塚村**  
お客様の宿泊に伴うCO2排出量をオフセット

**東京工科大学 × 北海道下川町**  
講義時の電気使用量及び学生が講義に参加するにあたり使用した公共交通機関の利用に伴うCO2排出量をオフセット

**株式会社ニューポート × 高知県梶原町**  
従業員の通勤・出張やオフィスの電力ガス使用、輸出入に伴うCO2排出量をオフセット

**株式会社ホットスタッフ・プロモーション × 宮崎県諸塚村**  
イベント開催やオフィスでの電力使用に伴うCO2排出量をオフセット

**株式会社ペーパー × 奈良県天川村**  
ZEROCO2ペーパー販売に伴うCO2排出量をオフセット

**コーユーレンティア株式会社 × 鳥取県智頭町**  
主要トラックの配送に伴うCO2排出量をオフセット



### 森も人も健やかに

講演やイベント、ツアーなどの「伝える」取り組みもmore treesの柱となる活動のひとつです。

森について知り、学び、体験し、足を運ぶことで、人々が生き生きとしていく姿をたくさん目にしてきました。現代社会のなかで失われつつある森と人の接点を増やし関わりを育みながら、森も人も健やかにになっていくことが私たちの願いです。

### 講演・セミナー

これまでの活動を通じて得た知見や事例を活かし、市民、企業、学生、行政、教育機関、林業関係者など森づくり未経験者から専門家までさまざまな方を対象に、多様な切り口で講演やセミナーを行っています。



隈研吾トークショー@エースホテル京都



プロダクトデザイン講義@桑沢デザイン研究所



森林保全活動講演@テルモン新作発表会



地域・企業と協働の森づくり講演@エコプロ2024

### イベント・ワークショップ

木に触れ、森を身近に感じられる「体験の場」を企画・運営し、子どもから大人まで幅広い年代の方にご参加いただいています。企業や店舗、学校、地域の公園など場所や参加者に合わせてカスタマイズしたイベントやワークショップのプロデュースも可能です。



スプーンづくり @湘南学園小学校アフタースクール



つみきワークショップ@エースホテル京都



お箸づくり@北海道足寄町



葉っぱスタンプ@北海道美幌町

### ツアー

活動地域とのネットワークを活かし、現地を訪れるツアーを実施しています。森での植樹、種採り、森林散策、林業現場の見学、地域の名所巡りや地域住民との交流など、現地だからこそその体験を通して森や地域とのつながりを深めていただけます。



種採り@鳥取県智頭町



植樹@高知県中土佐町



加工場見学@三重県大台町



苗木づくり@高知県梶原町



### 育てて活かす、木の文化

日本の森は人が植え、手入れをし、収穫するという人と森のかかわりの中で育まれてきました。手入れや収穫によって森から出た木を木材として利用することで、その収益を森づくりに還元できます。国産材をつかった「木材利用」は、世代をこえて受け継がれてきた森と木の文化を次世代に手渡すことにつながります。

### オリジナルプロダクト

more treesでは国産材をはじめとする森の恵みの活用を推進し、デザイナーや地域の職人と協働でオリジナルプロダクトを企画・製造・販売しています。



### 監修・プロデュース

さまざまなシーンで国産材利用をサポートします。たとえばイベントやキャンペーン用ノベルティの企画、商品の開発、オフィス・店舗のインテリアや什器の製作、端材アップサイクルや素材調達、空間の内装デザインや木質化、木材利用に関わる大小イベントの監修など、ご要望に合わせて幅広く対応しています。



12月、「日本被団協」のノーベル平和賞授賞式にあわせてノーベル平和センターに並べられた1000人の被爆証言を表現する1000個の木製オブジェ。その制作をmore treesがお手伝いしました。more trees代表で建築家の隈研吾がデザインを手がけ、被爆地の木材を使いたいという思いから私たちが日頃国産材を使ったものづくりで一緒にいるパートナーをあたって広島県産のスギ材を調達。日本の職人が手作業で仕上げました。2枚の薄いスギ板を日本の伝統技術「かすがい」でつなぎ合わせたこのオブジェは、被爆という人類が経験したことのない惨状を生き延び支え合って復興を遂げた広島と長崎の象徴であり、人々の結束と平和への希望を表現しています。



# サステナホテルを 目指して

株式会社スーパーホテル  
三浦留奈さん、 迫田耕太郎さん

## — 普段はどのようなお仕事をされていますか。

迫田：サステナビリティ推進室という部署で、サステナブルな取り組みを担当しています。「Natural, Organic, Smart」をコンセプトに健康でサステナブルなライフスタイルを提案しているスーパーホテルのブランドコンセプトを深め、お客様に訴求していくための取り組みを模索しながら具体的なアクションを起こしています。

## — スーパーホテルさんというホテル業界 唯一の「エコ・ファースト」企業に認定さ れるなど持続可能な取り組みを業界に先駆 けて進めてこられた印象が強いのですが、 サステナビリティに関する社内コミュニケー ションも活発ですか？

迫田：前任者の時代に社内コミュニケーションを念入りに行っていたので、社内浸透は十分できている状況です。現在は店舗単位でできるアクションを店舗担当者に連携したり、店舗担当者が悩んでいることがあればこちらからアイデアを出したりして、各店舗のサステナブルな取り組みと一緒に考えるコミュニケーションが多いです。



## — 三浦さんは迫田さんの後任としてサステナ ビリティ推進室へ異動になるとお聞きしまし た。他部署からは迫田さんたちの活動はどう 見えていましたか。

三浦：2024年はサステナビリティ推進室がリードして社内ワークショップを行っていました。そもそもサステナビリティとは何かという基本から、より詳しい内容までさまざまに学ぶ場が定期的であり、私も参加していました。ふだんひとりで考えているだけでなかなか人と交わさないと話題も含めて話し合いができて、とても盛り上がりましたね。

## — more trees と出会ってからなにか変化を感 じられることはありますか。

迫田：もともと地域貢献を経営理念に掲げているので地域活性のためにさまざまな取り組みを展開していましたが、地域とスーパーホテルで直接コミュニケーションしながらどんな取り組みができるのか探り探りで進めていた部分も多々ありました。more treesさんにあいだに入ってくることができるようになってからは、地域と連携した取り組みのクオリティやレベル感が上がったことを実感しています。たとえば岐阜県東白川村や宮崎県諸塚村の森林由来のカーボン・クレジットを購入して、宿泊に伴い発生するCO2排出量をお客様に代わってカーボン・オフセットする取り組みを行っています。

## — 地域や森を活性化するための木材利用にも 積極的に取り組んでくださっていますよね。

迫田：そうですね、地域産材をつかったものをホテルに導入してきました。ホテルのオープニングセレモニーの際、高知県産ヒノキを使ったアロマブロックをギフトとしてお客様に配布したり、館内に置くインテリアを岐阜県産ヒノキや大分県産

スギを使って制作したり。more treesさんとの関わりのなかで森林保全の考え方や保全の大切さに対する理解が深まったというのも大きいですね。森を守る、森を育むという思いに共感して、サステナブルな取り組みのクオリティが高まってきた印象です。こんなことやりたいなあとおふわとしたイメージをmore treesの兒玉さんに相談したら、こんなことができますよと上質のアイデアをいろいろいただけるのもありがたいです。

## — 2024年のハイライトとしてはどのようなこ とが挙げられますか。

迫田：more treesさんとの取り組みでいえば、ホテルの大浴場でつかう風呂イスと湯桶を制作して、木材利用の幅が広がったのが大きかったです。いかに長く使えるかを兒玉さんと一緒に繰り返し検証もしました。スーパーホテル全体としては、ファンの方々とコミュニケーションを深める取り組みとしてファンミーティングを開き、お客様がスーパーホテルを好きでいてくれる理由を見つめ直せたことが非常によかったです。「地域と連携した取り組みがいい」「天然ヒノキのアロマオイルの香りが気に入っている」といったお声がよく挙がるほか、「諸塚村や東白川村に行ってみよう」というメッセージもありました。

## — これから挑戦したいことはありますか。

三浦：CO2実質ゼロ泊の取り組みをはじめ、サステナビリティにこれだけ特化しているホテルの価値をいかにお客さまに伝えるか。日々アイデアを出し合っている状態ですが、ファンのみならず、地域のみならず、さらには高校生や大学生など若い人たちともサステナビリティのことを一緒に考えながら、スーパーホテル＝サステナホテルという認識をもっと広げていきたいですね。そのためにmore treesさんと一緒に何かできたらいいなと思っています。



迫田：前任者ともずっとやりたいと話していたのが「企業の森」づくりです。カーボン・オフセットや木材利用に加えて、地域での森づくりもそろそろ始めたいと思っています。

## — 実際に森に足を運ばれるとまた取り組み の広がりも見えてきそうですね。

迫田：足を運ぶといえば、スーパーホテルでは従業員がSDGsを実践で学ぶためのグリーンツアーを開催していて、これまで東白川村や諸塚村へ行っています。今後は、森づくりや木材利用でかわりのある地域のほうにも足を延ばし、それも従業員だけでなくスーパーホテルのファンの方やお客様とともに現場に触れるエコツアーをmore treesさんと一緒にやってみたいですね。たとえば風呂イスと湯桶は奈良県産材を使い、三重県のほうで加工していただいているので、そうした地域を訪れることで生産者と消費者が出会い、スーパーホテルのB2Cのお客様がmore treesとつながる機会にもなるような、そんな場が持てたらいいなと思います。

## — 最後に、サステナビリティへの思いを。

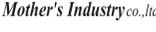
迫田：スーパーホテルの居心地の良さを考えたとき、おもてなし力があるのはもちろんですが、「地域とのつながり」からくる居心地の良さを大切にしたいという思いがあります。お客様とホテルにとどまらず、お客様とホテルと地域のつながりをこれからも育みながら、ビジネスホテルではなく「サステナホテル」という新しいホテルカテゴリを体現するために、サステナブルな取り組みを一層進めていきたいと思っています。



協賛者様一覧

Supporters of More Trees

<p>一生涯のパートナー <b>第一生命</b> Dai-ichi Life Group</p>		<p>あいおいニッセイ同和損保 MS&amp;AD INSURANCE GROUP</p>				
 <p>三井住友ファイナンス&amp;リース</p>	<p>Have a good Cashless. SMBC 三井住友カード</p>	 <p>Manulife マニユライフ生命</p>	 <p>UNITED ARROWS LTD.</p>			
	 <p>JR東日本びゅうツーリズム&amp;セールス JR EAST VIEW TOURISM AND SALES COMPANY LIMITED</p>	 <p>三井住友銀行</p>		<p>COLOURS</p>		
						

 傘はファッションだ。 UMBRELLAS ARE FASHION.			 ライフスタイル提案商社					株式会社オリエントコーポレーション   株式会社エス・ティー・シー   スピークス株式会社   株式会社IMCF   アイコニックボックス株式会社   株式会社ネイチャーズウェイ   株式会社PLAN-C   株式会社JTB   株式会社スタンダード   株式会社中島重久堂   株式会社NTTスマイルエナジー   有本開発株式会社   株式会社オープンパワー   株式会社セリオ   株式会社高松金属   株式会社東京白ゆり会   株式会社ドリームフィールズ   一般社団法人未来とコラボ   株式会社ミルク   株式会社たかくら新産業   株式会社ピープルフォーカス・コンサルティング   一般社団法人日本WPA   株式会社オフィス福原   有限会社藤芸   株式会社宇津木金属   ディオニー株式会社   株式会社ジョア   PLCパートナーズ株式会社   株式会社Q.E.D.パートナーズ   株式会社ZENZEN JAPAN   株式会社アーチ   アサヒベット株式会社   株式会社アジョイア・ジャパン   株式会社あたぼう   彩り株式会社   株式会社岡村商事   株式会社キゴコロ   株式会社キンコー   株式会社グリーンロード   株式会社グループ現代   株式会社コロバスタイル   サダシゲ特殊合板株式会社   株式会社新星コーポレーション   株式会社デラックス   バルカニタスジャパン合同会社   株式会社フォルデイル   株式会社フランドル   株式会社モノマネ   株式会社和田植木
	 あなたの未来を強くする					 三井住友ファイナンス&リースグループ		
								
 歴史50年の 東匠 三全 KASHO SANZEN				 ウーマンスマイル オンライン				
								
								
	 伊藤忠リーディング株式会社							
				 SINCE 1988				

※法人の名称につきましては、敬称を省略させていただいております。何卒ご了承ください。





人類は森とともにありました。  
森が崩壊したところでは文明が減んでいきました。

今、世界中で森林が崩壊しています。  
これは人類文明全体の滅びへの警告と  
言えるのではないのでしょうか。

実は日本は森林の多い国です。  
たくさんCO2を固着し、また水を保ち、多くの生命を養い、  
はたまた海まで育ててくれる貴重な森を、  
後々の世代まで残すために力を合わせましょう。

more trees!!

創立者 坂本龍一



都市と森をつなぐ

法人概要 Corporate Profile

## 一般社団法人 more trees

107-0052 東京都港区赤坂4-7-7 H&K 赤坂レジデンス 201  
Tel 03 (5770) 3969  
Mail [info@more-trees.org](mailto:info@more-trees.org)  
URL <https://www.more-trees.org>

### 事業内容

- ・国内外での森林保全（植林、間伐、整備など）
- ・国産材の普及
- ・森林由来のカーボン・オフセットサービスの提供
- ・森林に関するセミナー・イベント、森林を訪れるツアーの企画・開催
- ・被災地支援活動
- ・その他、森林に関する事業全般

### 設立

2007年7月19日

### 役員等

創業者 坂本龍一  
代表理事 隈研吾  
理事 池田正昭 見城徹 石橋直樹  
監事 山崎卓也

※本レポート内の文章・画像等の無断転載はご遠慮ください。

FSC マーク